

ワールドカフェのハーベストに関する研究

田 坂 逸 朗

(受付 2016年5月31日)

1. は じ め に

国内最初の本格的なワールドカフェは、2006年10月、日本ファシリテーション協会関西支部フォーラムにおいて、『ワールド・カフェーカフェ的会話が未来を創る―』（アニータ・ブラウン／デイビッド・アイザックス／訳 香取一昭／川口大輔）の刊行（2007年）に先立って、訳者の香取一昭氏によって行われた^{*1}。

この10年を、わが国のワールドカフェ進展のひと区切りとするなら、それは、フォーラム、コンファレンス、組織改革、市民協働、産学官連携、教育、ビジョンづくりなど、さまざまな分野・目的において、大きな普及の過程をなしてきたと言える。筆者のファシリテーター経験の10年はちょうどこの時期と重なっており、かつ、爾来、香取一昭氏に多大な教えをいただいていたこともあり、議論の場、対話の場で、多くワールドカフェ形式を導入してきた。10年のファシリテーターとしての登壇経験のうち、ワールドカフェ形式の投入は6割を超える。実務者として、ひとつひとつの現場と向きあいながら、「たいせつな問い」で場に問いかけ、全体セッション（収穫セッション）で集合知（ハーベスト）を紡いできた。

しかし近年、「未来を創る」対話としてすぐれた効果を持つワールドカフェが、分野・目的に沿った手段として用いられるのみならず、「対話」そのものを目的とするような、ハーベストなき（成果活用の事後計画なき）「対話状態」を現出することのみを目的とした援用も目立つようになってきた。普及がもたらす裾野の広がりにつられたバリエーションの多様化といえはそれまでだが、適切な収穫セッションの運営と事後活用計画の立案をしたくとも、それに関する技術の記述が未だ発展途上であり、ゆえに社会への援用が未整備である、と仮定したらどうだろう。現場経験の豊富な実務者が、その手法について精査研究し技術を公開することによって社会還元を行うという役割を任じてよいはずだ。ここでは、この仮定に立脚して、筆者自身が経験してきた多数の効果的なハーベストに、客観的な記述を試み、技法として精査し、汎用を容易にする全体セッション（収穫セッション）の運営法、とりわけ収穫（ハーベスト）に関する手法の記述を確立することを目論む。

対話の場は、ますますその重要度を増している。社会が複雑化し、専門性が先鋭化するこ

とで、専門と専門の狭間のニッチ領域が広がっていくにつれ、対話的でなければ解決できない事象が増大していく。成果ある対話の手法として、プログラムが明確に確立しているワールドカフェは、それに対応できるいわば必須の道具のひとつであるといえる。対話（話しあい）の希求に、どこまでも応えられるはずだ。

この論考によって、多くのワールドカフェが、成果活用志向を謳うことができるようになり、収穫セッションの技法（ハーベスト技法）の援用が簡便になり、ひいては、その社会実装が「未来を創る」、正統なるワールドカフェの普及の一助となることを期待する。

なお、論稿中、ワールドカフェそのものについては、脚注に解説するにとどめ、詳述しない。これは紙幅の都合であるが、また、読者を専門家・実務者、もしくは研究者と規定したためでもある。ご了解いただきたい^{*2}。

2. ワールドカフェの本則を読み解く

1995年のアニータ・ブラウンによるミルバレーのワールドカフェは、3日間のシンポジウムの締めくくりにラップアップ・セッション（総括セッション）としての開催であった。知的財産活用のリーダーシップをテーマにしたシンポジウムの通奏低音が「対話による未来創造」であったと紹介されている。ワールドカフェは「対話」の手法である。「対話（Dialogue）」の語の出自は、古代ギリシャに端を発する哲学にあるが、「思想の交流」を意味するこの語はまた、文学や教育の手法を経て、今や創造的な学習、行政への市民参加、組織改革などの際に活用される「ワークショップ」の代名詞のひとつともなっている^{*3}。

すでに答が明解であるものに対話を用いても意味がない。どこから手をつけてよいかわからないあいまいなものへ立ち向かうときの姿勢、意味や意義を見いだす探求的な態度が対話である、と言ってもいい。対話で未来に向きあう、と。

ワールドカフェのハーベストに関する考察にあたって、まずはじめに、『ワールド・カフェーカフェの会話が未来を創る一』に取り上げられている「全体での会話」（全体セッション）の技法について確認しておく。次に、筆者自身のワールドカフェ実務から50例を選び（サンプリングし）、種別とアクティビティ（技法）を分類精査する。最後に、その機序を客観的に記述し、ハーベスト技法としての場合分け、とりわけ、目的と問いとポストプロセスとの連関、およびファシリテーターの関与度について記述を確立する。

ハーベストは偶然効果を発揮するのではない。そこには一定の作用と法則があり、汎用可

能である。一定の作用と法則に基づく、汎用的な技法によって、対話の成果を集大成として明示する。事例を列挙し精査し場合分けをしながら、この作用と法則を見だし、再現性の高い技法として、その機序の客観的な記述を試みる。

私たちがまだ答えをもっていない純正の質問は、革新へとつながる招待状のようなものです。

アニータ・ブラウンは、ワールドカフェの「大切な問い」について、こう記述している。革新（イノベーション）を企図しなければ対話的であると言い難く、すなわち、ワールドカフェの文脈を違えてしまう。ここでまずはじめに、アニータ・ブラウンの『ワールド・カフェーカフェの会話が未来を創る一』に取り上げられているハーベスト技法について確認しておく。

著書中、世界におけるワールドカフェ事例全42例が紹介される中で、全体セッションの技法に関する記述があるものは、11例である。これに「原理7 集合的な発見を収穫し、共有する」に短く紹介されている参考例5例を含めるなら、総数16例である。「第10章カフェのプロセスを導く：会話をもてなすホスティングのアート」中でマニュアルとしてまとめられている「ワールド・カフェ・ホスティング・ガイド」の項に、「全体での会話（全体セッション）」とは、「集合的な知識を視覚化し、行動の優先順位を特定する」内省と統合のタウン・ミーティングのような場であるとの記述がある。この章に記載されている技法を、〈全体セッション（内省と統合）の本則〉として、16の事例・参考例を、読み解き直してみる。

なお、「全体セッション」の技法は、3つであるが、これに、第1章冒頭の事例である戦略的ダイアログ「知的資本のパイオニア」に記述がある以下を加えて、「全体セッション」の基本技法を4つとみなしておく。

- ◆グラフィック・レコーダーが、フリップチャートや壁画に発言を描く
- ◆テーブルクロスを見て回るギャラリー・ツアーを開催する
- ◆大きめの付箋に洞察をひとつずつ書き壁に貼る

（「知的資本のパイオニア」から）

- ◆テーブルクロスを中央に集めて周りに集まって会話する

16例は、すべてこの本則4つのパターンに弁別される。『ワールド・カフェーカフェの会話が未来を創る一』は、ワールドカフェに関する知見を広く共有しようと目論む伝導の書であ

り、その哲学と思想、意義や意味、ホスティング（もてなし）、大切な問いなどに多くの紙幅を割いている。ワールドカフェが、世界へと普及してゆく過程にあって、終盤でこれら4つの基本技法を用いて内省と統合を行う「全体セッション」の重要性は、けっして軽んじられてきたわけではないが、記述の少なさは、ひとつは、普及後の後進がエビデンスを用いて埋めるべき、予定された間隙であったかもしれない。その間隙の埋め方の前に、4つの基本技法に寄せて16例を精査分類しておく。

技法1 ◆テーブルクロスを中央に集めて周りに集まって会話する 3例

- 全員で会話をする。内省と共有を目的としているので、特に明示的な統合（「全体の可視化」）はなく、テーブルクロスをもって成果物としている。
- じゅうぶんな内省があったとき、もしくは、テーブルクロスにおける結論性が高かったとき、特に全体での集合知を明示しなくとも、結論は活用可能となる。

事例001：テーブルクロスを中央に集めて周りに集まって会話する | 「知的資本のパイオニア」(1995) | 戦略的ダイアログ | 参加24人

事例002：全体での会話、感情の共有 | メキシコ経済省「社会事業のための国立基金」 | フォーラム | 参加300人

参考例004：ペア・トーク

※リスト中の事例番号は、著書中の出現順。参考例は、「ワールド・カフェ・ホスティング・ガイド」にある例。

技法2 ◆テーブルクロスを見て回るギャラリー・ツアーを開催する 4例

- テーブルクロスに一手間かけ（最も注目すべき落書きに印のシールを貼る、など）、各テーブルを全員が全部を見て歩く。全員で順に見ていくこともあり、個々が自由に見歩きすることもある。
- テーブルごとの多様性が浮かびあがり、また、浮かび上がったテーブルにおける集合知が比較可能になり、集合知群が、個別に活用される自由さを持つ。

事例008：テーブルクロスに、注目すべき印のシールを貼ってビジュアル・マップにする | カリフォルニア大学サンタクルズ校 | ミーティング | 参加人数未詳

事例009：テーブルクロスの中央に残しておいた空白の楕円に絵やイメージをそれぞれ描く | サウジ・アラコム社 | ミーティング | 参加人数未詳

参考例001：テーブルクロスを並べた周りに集まってツアー

参考例005：カフェテーブルごとに展示物を作成して、ギャラリー・ツアー。見歩きながらコメントを自由に展示物に書き込む

技法3 ◆大きめの付箋に洞察をひとつずつ書き壁に貼る 4例

- ひとりずつが成果をキーワードに収れんさせ、モンスター・スティッキー・ウォール（巨大な付箋の壁）を共同で作成する。場合によっては、貼りながら精査分類し、大きなパターンを明らかにする。
- 壁の集合知への参加感が強く意識される。また、見出した個人のハーベスト（収穫）

の、全体でのポジションがわかることで、他者理解や共感性の強調、自己再認識に寄与できる。

事例004：付箋を書き、「探求の壁」に貼りグルーピングする | ワールド・カフェ・コミュニティ | ワールドカフェ | 架空

事例006：モンスター・スティッキー・ウォール→フューチャー・サーチ | テキサス大学サン・アントニオ校エグゼクティブ MBA プログラム | ダイアログ | 参加70人

事例007：巨大なマトリックス | デンバー・ロッジでの R&D ミーティング | ミーティング | 参加60人

参考例002：カードに書いて壁に貼って分類

技法4 ◆グラフィック・レコーダーが、フリップチャートや壁画に発言を描く 5例

—全体での会話の発言をグラフィック・レコーディングにまとめる。全体での集合知を明示する。

—大団円的な集合知が、各テーブルでの集合知を前触れとして、全員の前に姿を現す過程で、大きな一体感を得る。

事例003：沈黙の時間ののち、全体での会話→ナレッジ・ウェブのグラフィック・レコーディング→ペアになってアイデアの共有 | ペガサス社システムシンキング・カンファレンス | 大規模カンファレンス | 参加1000人

事例005：全体グループによる会話と壁画（グラフィック・レコーディング） | スカンディナヴィアン・サステイナビリティ・フォーラム | フォーラム | 参加人数未詳

事例010：キーパッドによる投票技術と集計結果の全体グループへの掲示 | アメリカン・ソサエティ・フォー・クオリティ | コンファレンス | 参加人数未詳

事例011：テーブルごとのテント・カードと全体のためのフリップ・チャート、ギャラリー・ウォークと「わいがやグループ」 | ファイナンシャル・プランニング・アソシエーション | コンファレンス | 参加人数未詳

参考例003：コンピューターでその場で新聞を発行

中央に集まる全体での会話は、小規模・中規模の人数の場に向く。テーブルでの会話と境目なくつながる全体での会話で、より深まりのある内省的で共有感のある終わり方を迎えることができる。ギャラリー・ツアーでは、祝祭感ある全体性を体感する。多くの有意義な会話があったことを、他者他テーブルを通して知る。共感性と多様性のエンディングとなる。モンスター・スティッキー・ウォールでは、共同作業が参加者をひとつにする。テーブルでの会話の意義を、さらに大きな壁が昇華させる、その共同作業の中で、全体の中に確かにプロットされたポジションに、新しい自らを見出す。グラフィック・レコーディングでは、大きな達成感を得る。大きなビジョンの一部をなす自らと、モザイク画のような調和的な意見合成に立ち会うことで、全員がなした真の会話を実感する機会を得る。

ワールドカフェの「大切な問い」が、革新へとつながる招待状であるなら、「集合的な発見を収穫し、共有する」という「全体での会話」は、どこまで「集合的な知識を視覚化し、行動の優先順位を特定」できるかによって、その質が規定される。あいまなものに立ち向かいながら、対話を通して内省と統合を行い、成果を編み出す帰結点としては、「集合的」「視覚化」「行動」が重要なキーワードである。

次章でいよいよ、このアニータ・ブラウンの4つの基本技法に沿って、筆者自身のワールドカフェ50例の種別とアクティビティ（技法）を分類精査する。

3. 適時適所のハーベスト

『ワールド・カフェーカフェの会話が未来を創る―』では、テーブルでの会話、第3ラウンドののちに行く、全員でのセッションを「全体での会話」と表現している。このセッションの目的は「集合的な発見を収穫し、共有する」、とりわけ「集合的な知識を視覚化し、行動の優先順位を特定する」ことであるとしている。ワールドカフェを紹介している、香取一昭／大川 恒の『決めない会議』では、「全体会議」と表記されている^{*4}。同じく『ワールド・カフェをやろう!』の中では、「全体セッション」と表記している^{*5}。野村恭彦の『フューチャーセンターをつくろう』では、「ハーベスト（収穫）」と表記されている^{*6}。筆者は、実務としてのワールドカフェにおいては、このセッションを「収穫セッション」もしくは「ハーベスト」と呼称してきた。「集合的な発見を収穫し」との記述に依ってのことである。この論稿の趣旨でもあるが、すなわち、ワールドカフェの成果活用という視点からは、全体セッションは全体がひとつになることに意味があるのみならず、そこで「集合的な発見」が「収穫」されることに意義がある。以降、筆者の事例にあっては、ハーベスト（収穫セッション）の呼称を用いる。

直近の現場を中心に、ワールドカフェを行った事例から、4つの技法に分類したのが以下である。50事例は、おもに2015年6月～2016年5月で、直近の日付から遡るとこの期間に、ファシリテーションに関する担当事例が201例あり、このうちワールドカフェ形式が134例あり、そのうち（この期間にない特筆すべき5例を含んで）50例を分類した。

[田坂逸朗の実務としてのワールドカフェにおけるハーベストの類型]

◆全体での会話（中央に集まって会話する）9例

田坂045：キーワード出し（NEXT キーワード）と全体での会話（NEXT 宣言） | FUKUOKA NEXT 2016 プレカフェ（TAO CAFÉ + 福岡大学地域活性支援塾 OB 有志） | ダイアログ | プロジェクト・スターター | 参加40人（2016年3月10日）（多数回開催）

- 田坂026：全体での会話 | 福岡市原子力防災訓練ふりかえりワークショップ | ワークショップ | 相互啓発 | 参加200人 (2015年9月12日)
- 田坂012：キーワード出しとリレー発言 | こども未来会議 in いわき | ワークショップ | 相互啓発 | 参加30人 (2015年7月19日)
- 田坂009：キーワード出し、キーワードを掲示しながらランダムウォーク | サントリー・ワールド・リサーチセンター キックオフ | ワークショップ | 相互啓発 | 参加240人 (2015年7月10日)
- 田坂008：テーブルごとにダイアログ | 北九州市民カレッジ「地域リーダー養成講座」 | 講座 | 相互啓発 | 参加40人 (2015年6月30日)
- 田坂007：イエローマーク | 北九州市社会福祉協議会 校(地)区社協 新任役員研修「みんなで楽しく、アイデアやヒントを見つける方法」 | 講座 | 参加100人 (2015年6月29日)
- 田坂006：イエローマーク | あすばる行政職員のための男女共同参画セミナー | 講座 | 相互啓発 | 参加40人 (2015年6月22日)
- 田坂002：イエローマークとテーブルレポート | 檜葉町帰還準備のための住民対話「檜葉ならではの祭」ワークショップ | ダイアログ | 意見交換 | 参加40人 (2015年3月21日)
- 田坂001：全体での会話 | 北九州市まなびとESDステーション 大学生による高校生・中学生対話「北九州夢サミット」 | ワークショップ | 相互啓発 | 参加100人 (2015年3月8日)

※リスト中の番号は、日付順。いったん番号付けしたあとで、
類型別に整理しなおした。

◆ギャラリー・ツアー 6例

- 田坂040：イエローマークとギャラリー・ツアー | おごおり男女共同参画推進協議会・まちづくりワークショップ | ワークショップ | 当事者性の獲得 | 参加80人 (2016年1月17日)
- 田坂034：キーワード出しと全体での会話、ギャラリー・ツアー、キーワードへの賛同の印付け | 広島修道大学・3センター合同事業「修大の学びあい」 | 交流会 | 情報交換と相互啓発 | 参加90人 (2015年12月4日)
- 田坂022：イエローマークとギャラリー・ツアー | 福岡市城南区保健所 福岡市子ども総合相談センター要支協ワークショップ | ダイアログ | 意見収集 | 参加120人 (2015年8月18日)
- 田坂020：イエローマークとギャラリー・ツアー、基調のメモ | 北九州ボランティア大学校まちづくりセミナー「よりよく生きる」 | 講座 | 相互啓発 | 参加40人 (2015年8月8日)
- 田坂013：ギャラリー・ツアー | 福岡市水道局対話型研修 | 研修 | 相互啓発 | 参加20人 (2015年7月21日) (多数回開催)
- 田坂011：キーワード出しとギャラリー・ツアー | 福岡女学院看護大学「看護学特論」 | 授業 | コンセプティング | 参加60人 (2015年7月13日)

◆モンスター・スティッキー・ウォール 12例

- 田坂050：ストーリーテリングカフェ (会話のフィードバック) と付箋の交換、モンスター・スティッキー・ウォールと追加のグラフィック・レコーディング | 未来会議 in いわき 2016 第1回 | 大規模ダイアログ | アーカイブ | 参加70人 (2016年4月23日)
- 田坂048：テーブルごとにキーワード出し、ウォールに貼り出しコメントをグラフィック・レコー

- ディング | 自治労福岡県本部60周年キャラバン | ダイアログ | 意見収集 | 参加50人 (2016年3月26日) (多数回開催)
- 田坂042: テーブルごとにキーワード出し, ウォールに貼り出しコメントをグラフィック・レコーディング | 広島市男女共同参画推進センター男女共同参画推進講座 | 講座 | ファシリテーション演習 | 参加40人 (2016年2月28日)
- 田坂036: テーブルごとにキーワード出し, ウォールに貼り出しコメントをグラフィック・レコーディング | 熊本県むらづくり人材育成塾 | 講座 | ファシリテーションの演習 | 参加30人 (2015年12月11日)
- 田坂030: モンスター・スティッキー・ウォールと追加のグラフィック・レコーディング | 資源エネルギー庁「地域のじまんづくり」プロジェクト薩摩川内市田中旅客待合施設活用ワークショップ | ワークショップ | コンセプティング | 参加20人 (2015年10月26日)
- 田坂027: モンスター・スティッキー・ウォール | 奥出雲町100人未来会議 | 大規模ダイアログ | コンセプティング | 参加130人 (2015年9月13日)
- 田坂024: テーブルごとにキーワード出し, ウォールに貼り出しコメントをグラフィック・レコーディング | 福岡市原子力防災計画対話型研修 | ワークショップ | 相互学習 | 参加60人 (2015年8月29日) (多数回開催)
- 田坂021: モンスター・スティッキー・ウォールとリレー発言 | 福岡市自主職員勉強会「オフサイトミーティング・明日晴れるかな」 | ダイアログ | 意見交換 | 参加30人 (2015年8月10日)
- 田坂017: キーワード出しとモンスター・スティッキー・ウォール | 廿日市市職員研修・協働によるまちづくり講演会 | 講座 | 相互啓発 | 参加30人 (2015年8月4日)
- 田坂016: キーワード出しとモンスター・スティッキー・ウォール | 鹿毛病院新人フォローアップ研修 | 研修 | プロジェクト・スターター | 参加70人 (2015年7月30日)
- 田坂014: テーブルごとにキーワード出し, モンスター・スティッキー・ウォール | 福岡市原子力防災計画対話型研修・職員編 | ワークショップ | 相互学習 | 参加50人 (2015年7月24日)
- 田坂010: テーブルごとにキーワード出し, モンスター・スティッキー・ウォール | 「武雄市まち・ひと・しごと創生総合戦略」策定に係るニーズ調査「武雄市の今と未来を語る会」 | ヒアリング | 市民意見収集 | 参加40人 (2015年7月12日) (多数回開催)

◆グラフィック・レコーディング 8例

- 田坂049: 全体での会話とグラフィック・レコーディング | 広島修道大学地域ノベーションコースイノベーションコミュニティサロン | 情報交換会 | 情報交換 | 参加20人 (2016年4月7日)
- 田坂047: 全体での会話とグラフィック・レコーディング | 「地域のじまんづくりプロジェクト」玄海町 | ダイアログ | ふりかえり会 | 参加20人 (2016年3月24日)
- 田坂043: 全体での会話とグラフィック・レコーディング | 北九州市民カレッジ | 講座 | ファシリテーション・グラフィックの演習 | 参加20人 (2016年2月2日)
- 田坂035: ピッチとキーワード出し, 全体での会話をグラフィック・レコーディング | 広島市西区役所職員と広島修道大学地域イノベーションコース学生の対話 (授業「ひろしま未来協創プロジェクト (都心のイノベーション)」実習) | 授業 | コンセプティング | 参加50人

(2015年12月5日)

田坂033：全体での会話をグラフィック・レコーディング | 広島市西区「憩いの空間」ワークショップ | 語り場 | コンセプティング | 参加50人 (2015年11月28日)

田坂025：全体での会話とグラフィック・レコーディング | 環境省除染情報プラザ「ポジティブカフェ」 | ダイアログ | 意見収集 | 参加40人 (2015年8月30日)

田坂023：全体での会話とグラフィック・レコーディング | 廿日市市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定「廿日市市総合戦略検討会議」 | 戦略検討会議 | コンセプティング | 参加30人 (2015年8月26日)

田坂015：中央に集まってダイアログ, グラフィック・レコーディング | 福岡大学市民カレッジ「キッズエコクラブ・親子で学ぶスマート省エネ発想術」 | 講座 | 相互啓発 | 参加20人 (2015年7月25日)

香取一昭は自著『ワールド・カフェをやろう!』をガイドブックと捉え、収穫セッションについて、アニータ・ブラウンの4技法に端的に触れている。

- ひとことずつ感想を述べる
- テーブルごとに発表する
- 模造紙に書かれた内容を共有する^{*7}
- ポストイットにキーワードを記入する^{*8}
- ファシリテーション・グラフィックやマインドマップを使う^{*9}
- 粘土でイメージを形にする

また、「他の手法との組み合わせ」として、以下を紹介している。

- OST^{*10}
- AI (アプリシアティブ・インクワイアリ)^{*11}
- フューチャーサーチ^{*12}

アニータ・ブラウンの事例にはわずかにしか取り上げられていない「他の手法との組み合わせ」だが、これになぞらえるなら、田坂事例50例には、15例の「他の手法との組み合わせ」にあたる援用があった。

◆他の手法との組みあわせ 15例

- フィッシュボウル (もしくは、代表者ミーティング)

田坂041：ストーリーテリングカフェ (会話のフィードバック) とフィッシュボウルとグラフィック・レコーディング | カリタス修道女会・院長・事業責任者研修会議 | コンファレンス | 組織改革 | 参加80人 (2016年1月26日)

田坂044：代表者ミーティング | 鹿毛病院新人フォローアップ研修 | 研修 | プロジェクト・スター

ター | 参加70人 (2016年 3月 9日)

田坂029: 代表者ミーティングとグラフィック・レコーディング | 未来会議 in いわき 2015第 2 回 | 大規模ダイアログ | アーカイブ | 参加70人 (2015年10月24日)

○OST (もしくは, マグネットテーブル)

田坂032: OST と, 全体での会話をグラフィック・レコーディング | サントリーウェルネス | ダイアログ | プロジェクト・スターター | 参加150人 (2015年11月27日)

田坂028: OST とグラフィック・レコーディング | 資源エネルギー庁「地域のじまんづくり」プロジェクト薩摩川内市甌島活性化ワークショップ | ワークショップ | プロジェクト・スターター | 参加20人 (2015年10月 6日)

田坂019: OST | 福岡大学地域活性支援塾 | 学外講座 | 地域支援学習 | 参加30人 (2015年 8月 8日)

田坂005: OST とグラフィック・レコーディング | 九州大学産学連携センター 地域政策デザイナー養成講座 | 講座 | チームビルディング | 参加30人 (2014年 5月10日)

田坂004: OST とグラフィック・レコーディング | 久留米市観光 MICE 戦略策定のための市民対話ワークショップ | ワークショップ | コンセプティング | 参加20人 (2014年 8月22日)

田坂003: OST とグラフィック・レコーディング | 双葉郡 8 町村教育長会教育復興ビジョン「子供未来会議」 | カンファレンス | コンセプティング | 参加90人 (2014年 3月27日)

田坂046: マグネットテーブルとファシリテーターからの読み上げ報告 | FUKUOKA NEXT 2016 | 大規模ダイアログ | プロジェクト・スターター | 参加130人 (2016年 3月13日)

田坂039: マグネットテーブルとグラフィック・レコーディング | 広島修道大学・iCafe×イノベーション・コミュニティ・サロン | ダイアログ | プロジェクト・スターター | 参加30人 (2016年 1月 7日)

田坂037: マグネットテーブルとグラフィック・レコーディング | KO-TO (コート) 東小金井事業創造センター コウカシタゼミ「ファシリテーション実践セミナー」 | 講座 | ファシリテーションの演習 | 参加30人 (2015年12月13日)

田坂031: マグネットテーブルと全体での会話 | カリタス修道女会 宣教フォーラム | ダイアログ | コンセプティング | 参加80人 (2015年11月22日)

○事後活用のための意見集収集

田坂038: カードに要点を記入 | 広島修道大学地域ノベーションコース・授業「過疎地域のテーマ発見」 | 授業 | ふりかえり | 参加50人 (2015年12月16日)

田坂018: キーワード出しとその収集, パブリックコメント化 | 福岡市「みなとみらいカフェ」 | 市民参画 | パブリックコメントの募集 | 参加130人 (2015年 8月 7日)

50例では, モンスター・スティッキー・ウォール12例, 他の手法との組みあわせの中のOST (およびマグネットテーブル) 10例が目立った。ほかに, 何らかのグラフィック・レコーディングは, それのみを行った例は 8 例であるが, 何らかの技法に加えてそれを行った例を合わせるなら, 計17例あった。これらの収穫セッションの技法からは, 大まかな以下のような傾向が読み取れる。

◆全体での会話（中央に集まって会話する）

全体での会話は、意見交換や相互啓発のワークショップ、また、講座や交流会に向く。シンプルで深い終わり方を迎えることになる。少人数が推奨される。テーブルレポートは、ファシリテーター以外に、レポーターを置き、参加者に成り代わって客観的にテーブルクロスを紹介するもので、これによって、ワールドカフェの会話のラウンド中の話しやすさから一転、全体での発言となることからの発言のしにくさを乗り越えることができる。



北九州市まなびとESDステーション 大学生による高校生・中学生対話「北九州夢サミット」(2015年3月)

◆ギャラリー・ツアー

ギャラリー・ツアーは、それぞれのテーブルの風土をたいせつにする。研修やワークショップに向く。イエローマークは、収穫の特定をする簡単な方法で、テーブルクロスの、重要と思われる箇所に目立つ色で強調をしたのち、ギャラリー・ツアーを行う。テント・カード（重要なキーワードをテーブルクロスの落書きから抜き書きしたもの）を作成してテーブルに並べ、ギャラリー・ツアーを行うこともある。テント・カードに自由にコメントを書き込めるとしたり、賛同の印をつけることを加えても効果がある。



福岡市水道局対話型研修（2015年7月）

◆モンスター・スティッキー・ウォール

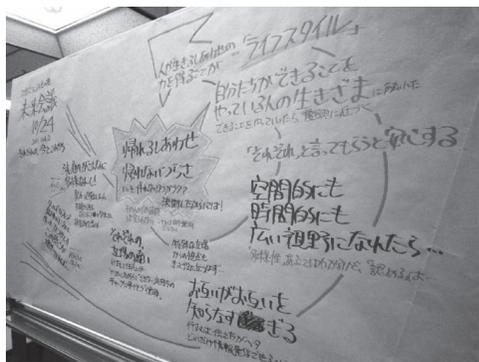
モンスター・スティッキー・ウォールは、大規模ダイアログ、意見収集、講座に向く。特に、コンセプト（基幹概念の割り出し）やプロジェクト・スターター（個別の活動グループの立ち上がり喚起）を志向するとき、効果を発揮する。最終ラウンドなどで、壁に貼り出す付箋を、発言者ではなく、聞いた者が聞き取りを書く「ストーリーテリングカフェ形式（会話のフィードバック）」もしばしば導入した。追加のグラフィック・レコーディングやリレー発言（壁のキーワードに補足発言をし、気になるキーワードを選んで次の発言者を指定する）などを行うと、さらに、共有感と一体感が増し、出力された成果に当事者性が喚起される。また、その当事者性の喚起を目的に、貼り出すときの分類整理を、ファシリテーターが行うのではなく、参加者が相互に連携しあいながら自ら行う方法もたびたび援用した。



未来会議 in いわき2013（2013年8月）

◆グラフィック・レコーディング

グラフィック・レコーディングは、ダイアログやコンセプトングに向く。全体での発言を書かない場合と書く場合で、場から感じ取れる意義が変わってくる。書かない場合、個をたいせつにする内省性が溜まり、書く場合、創発を歓迎する創造性が喚起される。かつ、場が一体となってひとつのものに到達した印象が生まれるため、書くことには、参加者の行動喚起をする重要な効果があると思われる。その意味において、「集散的な知識を視覚化し、行動の優先順位を特定する」ということの旗艦技法がグラフィック・レコーディングである、と言える。



未来会議 in いわき (2015年10月)

なお、ファシリテーションの文脈では、ファシリテーション・グラフィックという呼称が用いられ、シンポジウム、コンファレンスなどの文脈では、グラフィック・レコーディングの呼称が用いられるようであるが、おもに、書くことによって、さらなる発言を喚起し、場へ影響を返す双方向性を持つ「最中の」作業がファシリテーション・グラフィックであり、最中には場に影響を与えず、事後のふりかえりに供する記録性の高いものが、グラフィック・レコーディングである、と弁別できる。ここでは、ファシリテーション・グラフィックとして行った技法も含めて、グラフィック・レコーディングの項に含んでいる。

◆他の手法との組みあわせ

○フィッシュボウル (もしくは、代表者ミーティング)

フィッシュボウルは、コンファレンス、研修、アーカイブを目的とする対話に向く。グラフィック・レコーディングを加えるとよい。また、内側のディスカッサント(議論者)と外側の観察者を同数とすることがフィッシュボウルの原則だが、大規模な場において中央でディスカッサントがふりかえり的な報告の対話を行うなら、「代表者ミーティング」と呼ぶほうがよい。代表者が摘出されたテーブルから中央へ送り込まれるという構造をして、全体を象徴する最終のカフェの会話、ということが演出され、結論性・統合性が高くなる。時として、ファシリテーターも代表者ミーティングのテーブルに着く。



未来会議 in いわき (2015年10月)

○OST (もしくは、マグネットテーブル)

OSTは、ダイアログ、チームビルディングやコンセプトング、プロジェクト・スターターに向く。偶然を活用するワールドカフェの直後、そのテーブルで得た革新へのキーワードを用いて、直後に OST

に移行することによって、ひるがえって焦点が明確な即席の分科会が開かれることで、行動への段階を着実に進むことになる。ここでも、グラフィック・レコーディングの活用が効果的である。マグネットテーブルは、OSTが情熱と責任に即して少数のテーマ提供者が名乗りを上げるのに対して、全員が何らかのキーワードを書き、そのキーワードを頼りに、呼びあう者どうしがグループを形成する、OSTの簡易版である^{*13}。OSTやマグネットテーブルののちは、グループごとに発表する時間を短縮するため、しばしばファシリテーターからのグループテーマ読み上げ報告のみとすることもあった。



いわき未来会議（2013年4月）

○事後活用のための意見集収集

ごくまれに、カードに要点を記入し、そのカードを回収するなどして、特に明示的な収穫セッションを置かないこともある。これは、ふりかえりや市民参画、意見収集などで、キーワード出しとその収集そのものを目的とするときで、回収したものには、活用する責任が発生する。成果活用の観点からは、回収の際、「参考程度にする」ととどめず、活用の事後計画をしっかりと参加者に伝えるべき責務を有する、とすべきである^{*14}。「参考程度」以上の活用を行うとき、これは、「協創的ヒアリング」と呼べるものであり、アンケートに替わる、質の高い調査を行うことができる。活用にカード・インテグレーション技法などを用いて、統合された意見の全容を捉まえる調査報告を行うなど、しばしば多数者協働の重要な局面で、このハーベスト技法を用いてきた。



報告書・提言書にまとめることも重要な事後活用

香取一昭の「他の手法との組み合わせ」にある、AI（アプリシアティブ・インクワイアリ）、フューチャーサーチとの組み合わせも、効果的である。AIとの組み合わせでは、ワールドカフェの収穫セッションでコアマッピングを行ったり、フューチャーサーチとの組み合わせでは、ワールドカフェの収穫セッションでタイムラインのワークを行ったり、さらには、ワールドカフェに至る前段で、AI、もしくは、フューチャーサーチを行うことも効果が高い。ホールシステム・アプローチとして、これらは組み合わせの相性がよい。

以下に、この考察から得られた各特徴をさらに整理し、7つの観点として表にまとめたものを示す。この7つの観点が、ハーベスト技法7つの選択に寄与する場合分けであり、作用と法則、機序のまとめである。

7つの観点は、「ハーベストの目的」「変化（作用）」「成果」「報告性」「ポストプロセス」「ファシリテーターの関与度」「大切な問い」の傾向とした。これらは、7つのハーベスト技法への弁別から得られた、読み取るべき機序である。7つのハーベスト技法は、ワールドカフェ単体の手法としての基本の4技法を、表記の順に、内省から創造へと至る汎用性の高い技法として捉えることができ、他の手法との組み合わせの3技法は、より成果を具体化するアプローチの技法と捉えることができる。特に、後述するが、ポストプロセスによる選択は重要である。

ハーベスト（収穫）は、対話の貴重な産物である。参加者（出席者）が、深い内省と洞察、偶然の他花受粉と新結合によって、深め、編み出した、革新へとつながる「問い」への答辞である。対話そのものが、参加者に影響を与え、個々人が変容のチャンスを得ることと、収穫を、あってもなくても変わらないもの、とすることは、意義の次元を異にするものであつ

ハーベスト技法	ハーベストの目的	変化（作用）	成果	報告性	ポストプロセス	ファシリテーターの関与度	「大切な問い」の傾向
全体での会話 (中央に集まって会話する)	内省	個の感覚変容の端緒	対話による個人の行動変容	低い	個人での活用(もしくは、新たなコミュニティの創設)	低い	意義を問う。哲学的。リフレーミングを促す
ギャラリー・ツアー	共有	多様性の受容	多様性と共感性の獲得	中程度	全体的なキーワードの抽出	中程度	捉え方の多様性にアクセスする。行動喚起
モンスター・スティッキー・ウォール	網羅・全体像の把握	大きな視点・世界像の獲得	全体性と個の有用感の両立	中程度	個々の観点における各論への着手	高い	具体の立案
グラフィック・レコーディング	統合と創造	統合への参画	創発による統合された全体像	高い	ビジョンやコンセプトへの援用	高い	ビジョンを問う。創造性を喚起する
他の手法との組みあわせ							
フィッシュボウル(もしくは、代表者ミーティング)	あいまいさの払拭、対話の結論性の強調	対話過程の共有による関与性の確認	対話成果の共有による確認、概念全体の俯瞰	高い	現状理解の更新、感覚の共有による次段階への移行	高い	高い開示性を要求するような認識を問う
OST(もしくは、マグネットテーブル)	具体化、プロジェクトリーダーの登場	主体性と行動力の獲得	プロジェクトなど個別具体の活動の端緒	高い	対話を行動に直結させる、個別具体の活動支援	高い	主体性や当事者性を喚起する問い
事後活用のための意見集	意見収集、とりわけ対話によって創発された、深い洞察に基づく意見の収集	他者との対話から自意見が進化・深化する。個人の主張が整理され、触発意見、創発意見が生まれる	当事者性、主体性の高い多数の意見群	高い(かつ、ワールドカフェでは完結していない)	ポストプロセスを本体とする。キーワード群からコンセプトやビジョンを改めて組み立てる	事後も含めて、高い	答そのものを求めるアンケート的な質問

て、優劣の議論ではない。前者は、研修や交流交歓を目的とする場合には、矛盾はない上に、これからワールドカフェがミーティングの手法からエンターテインメントの手法へと拡張していくことも予想されてしかるべきだろう。この論稿においては、「アニータ・ブラウンのワールドカフェ」に依拠しながら、ミーティング、とりわけ対話による内省と統合、創造の手法としてのワールドカフェという前提においての、備えておかなければならないハーベストの機序を論じたい。対話による内省と統合、創造という成果は、その成果を何とするのか、どう位置付けるのか、どう活かすのか、その事後活用計画（ポストプロセス）を重要視して、ワールドカフェの設計にかからなければならない。ポストプロセス設計（ポストデザイン）なく開催されるワールドカフェが普及するなら、すなわち、成果が活用されないことが常態化するなら、ワールドカフェが誕生したときに想起されたその有用性は、普及によっては敷衍できないという未来を想定せざるを得ない。ハーベストなき、成果活用なきワールドカフェは、未来に関与する覚悟のない、未完の予行にすぎない。

4. もう「楽しいだけだ」とは言わせない

ハーベストこそが、未来を創造する。ハーベストは、会話の付属品や副産物ではなく、ゴールであり成果（アウトカム）である。成果を目論んで意図してハーベストの明示をもってその場を終え、かつその成果を活用することを意識しておかなければならない。ハーベストなき「お楽しみ交流会」的ワールドカフェや、対話という手段を目的化した対話、知見の教授やテーブル分科会のためのワールドカフェふうのグループ学習は、ワールドカフェを援用した別目的の、似て非なるプログラムである。

1995年を起算点として、2015年には、ワールドカフェ20周年記念イベントが世界各国で開催された。その日本イベント「ワールドカフェが開く、社会・組織・コミュニティ」の主題に、「ワールド・カフェの神髄～もう「楽しいだけだ」とは言わせない！～」とある。楽しいだけに終わってしまったワールドカフェは、事前に何を考えていればよかったのか、何を備えていなければならなかったのか。「集合的な知識を視覚化し、行動の優先順位を特定する」ハーベストのための留意点について、以下に6点を述べる。

(1) 目的は何か？

どう活かしたいからワールドカフェを行うのか、目的の明確化が、ハーベストの実行性に直結している。どんな成果を望んでおり、なぜその成果が必要になっているのか？ ハーベスト志向のワールドカフェでは、「大切な問い」の前に、目的と対をなす成果についての熟慮

が必須である。いわゆるバックキャストして（ゴールイメージからの逆算的な立ち戻りの思考法で）、ハーベストから「大切な問い」の立案に着手する。

(2) ポストプロセス（事後活用の計画）

活用計画のないハーベストとは、せっかくの未来創造の端緒であったものを、未着手のまま保留してしまうことを意味している。参加者個々人の判断と行動にゆだね、ハーベストの明示なく場を散会するなら、集合知を編み出した意味と意義があいまいになってしまう。ポストプロセスのないワールドカフェ（かつ、参加者のゴールイメージがあいまいなまま敢行するワールドカフェ）はまた時として「ガス抜き」「アリバイ」「帳面消し」との批判を受けることになる。

逆であって、ポストプロセス（事後計画）こそ立案の端緒である。ワールドカフェを行えば何か成果が出るだろう、成果が出たら出たで、出てから考えよう、ではないバックキャストとは、「活用からの計画立案」である。何が明示されていないのでワールドカフェが必要であると感じたのか、何を創造すべきとしてワールドカフェを開催しようとしているのか。準備 8 割現場 2 割とは「ファシリテーター」たちがつとに標榜していることだが、筆者はこれを、準備 4 割現場 2 割事後 4 割と言い換えている。準備と同じくらいのエフォートを事後に振り分けるべきだとの志向による。

(3) ハーベスト技法をどう選ぶか？

目的・「大切な問い」・ポストプロセスの 3 つが密接に関連している。選択の観点は 4 つある。ひとつめは、ハーベスト技法の選択とは、成果の記録方式の選択であるということ。どうたどり着いた成果であるゆえ、活用性が高い、と言えるのか、熟慮の上でハーベスト技法を選ばなければならない。ふたつめは、場の風土に適時適切であるかどうかということ。たとえば、せっかくワールドカフェが少人数に別れカフェのような語らいに、発言のしやすさと対話の深まりを重要視したにも関わらず、収穫セッション（全体の会話）で大人数の前での発言を要求してしまうことが、ともすれば、公式見解的な結論発表に終始してしまい、せっかくのカフェ的会話の妙味をかき消してしまう。場の風土にそぐうハーベストがよいハーベストである。3 つめは、参加者の期待はどこにあるかということ。義務性の高い場かどうか、参加意向は高いかどうかの度合いにもよる。4 つめとして、ファシリテーターの経験量や力量を考慮しておくべきであるという点を上げておく。ハーベストは、「大切な問い」とポストプロセスをつなぐ橋渡しのコンテンツ群である。このコンテンツのシェイプに至るプロセスの微修正をその場でできるファシリテーターが担当することが望ましい。

(4) カフェホストとファシリテーター

『ワールド・カフェーカフェの会話が未来を創る―』には、ファシリテーション、ファシリテーターという言葉はごくまれにしか語用されていない。一貫して、その司会進行役は「カフェホスト」と呼称されている。香取一昭は、収穫セッションについて、「カフェ・ホストがファシリテーターとなって、全体でダイアログする」と記述している。特に、ハーベストの事後活用に注力するなら、収穫セッションにおいて「ファシリテーター」であることを強く意識しておかなければならない^{*15}。ワールドカフェを通して見えてくるのは、ファシリテーターとは何者か、である。ワールドカフェにおけるファシリテーターというスタンスはこれからますます重要度を増すと思われる。

(5) ワールドカフェに見る行動変容と創造性

ワールドカフェにおける対話は、自身の発言が場を動かしていくさまから、自己有用性を認識し、行動変容と社会活用の敷居を下げる。個人の言葉の枠組みや行動基準が変容していく機会が何度も与えられ、リプロデュース（再創作）を容易にする。自己有用感、当事者性、創発性が、個人において高まっていく。この行動変容を、予感のようなものから確信へと確からしくする役割をハーベストは担っている。ここでいう創造性は、リプロデュースから生まれる再創造に近い。

(6) 「世界観」の俯瞰と再選択

ハーベストは、たとえテーブルでの会話が私益からはじまったとしても、それが、共益を経て、公益へと昇華した査証として場の公正性と努力を写す。ラウンドの遷移から、共感－再解釈－伝達－多様化－再共感 という変容を経て、その成長差分の合成が、ハーベストの集合知となる。よって、ハーベストには全体を象徴する、合成（統合と融合）による「世界観」が描かれることになる。個々人は、成長差分を活用しながら「象徴的世界観」というマップの中から、個人の意見や感覚や未来計画の再選択を行うことが可能になる。

5. いかにして未来をシェイプするか

ハーベストは、非破壊検査のようであり、非侵襲性の治療のようでもある。侵襲せず、描写によって、（場に気づきを促す、というより）すでに起きた「よい気づき」の達成性を強調する。アダム・カヘンが言うように、社会が、「させる力」ではなく「する力」の総和となることができたなら、ファシリテーションは、誰かが誰かを促すことにとどまらず、「相互の促しあい」として昇華するだろう。ハーベストとは、その証左の可視化である。「させる力」に

力で対抗する前に、自らが未活用な「する力」を、自らとの対話を通して「見える化」する、それを理想のハーベストであるとしたい。

そして、ここまで見てきたように、ハーベスト志向、ハーベスト重視によるバックキャスト的ワールドカフェの立案は、ワールドカフェ本来の目的をより確信性の高いものにする。目的・「大切な問い」・ポストプロセスからそれが設計されるとき、ハーベスト技法は明快に選択される。中央に集まる全体での会話、ギャラリー・ツアー、モンスター・スティッキー・ウォール、グラフィック・レコーディング、の各ハーベスト技法や、OST、AI、フューチャーサーチ、カード記入回収、フィッシュボウルの、他の手法との組み合わせは、代表的な「成果の〈視覚化〉の技法」にほかならず、集合知を収穫・視覚化し、行動の優先順位を特定するという、欠いてはならない、ワールドカフェの重要なクライマックスにほかならない。

「カフェ的会話が未来を創る」の原文は、

Shaping Our Futures Through Conversations That Matter

である。Create でも Generate でもなく、Shape という語用に、ワールドカフェのやさしさが込められている。未来のシェイプのしかたとして、最後に、以下の考察を述べて稿を閉じたい。これらが、ハーベスト志向のワールドカフェで起きたことの機序、ワールドカフェの機序に追加すべき項である。

【咀嚼の機会を得る】

テーブルで噛みしめていく概念が、ある一定の成果としてハーベストに表現されるとき、咀嚼の機会が得られたと感じることができ、より創発の可能性が高まる。語るべきことを語りあえる、じゅうぶんな咀嚼から、思考を未来へ向けることができる。アニータ・ブラウンの言う「中核プロセスとしての会話 (Conversation as Process Core)」とは、会話を咀嚼の機会と捉えることであると解釈できる。

【言葉を磨く】

会話には意義があったと自覚されることで、自身が語用してきた言葉が、自発言によって確からしくなる。特に、ラウンドをまたぐ席替えて、他者意見も含め「伝える」の経験から、言葉は磨かれていく。磨かれた実感を持つに至ったとき、その予感是最終的にハーベストを通して確信へと昇華し、行動（「する力」）を再装備する。

【プレイヤー（実践者）を呼び覚ます場】

ハーベストが背中を押すなら、ワールドカフェからプレイヤー（実践者）が呼び覚まされ、立ち上がってくる。「プロジェクト・スターターの苗床」とも呼べるものがハーベストであり、参加者が参加者を鼓舞し支援し自走するプロジェクトがスピノフ（派生）する場として、ハーベストをクライマックスとするワールドカフェが化学反応のつぼとして機能する。

【アーカイブとしてのワールドカフェ】

自身の言葉は自身に帰結する。テーブルでの小さなアウトプットが、自己言及的アーカイブ、もしくはパブリッシング（公開）の機会となるとき、その場はその時点での自身に出会い、かつ、タイムラインに刻まれていくアーカイブとして、その個々の感覚がハーベストにモザイク画を描いていく。

6. お わ り に

ワールドカフェは、難しい。これは、ファシリテーターとして対話の場を担ってきた実務者としての実感である。プログラムがシンプルであるがゆえに、そこに安住してしまう危うさと、あいまいな状況に対して、成果もあいまいでよしとする「易きに流れる」危うさに抗うことの難しさである。

「大切な問い」が革新（イノベーション）への招待状であるなら、ハーベストはその招待に応える覚悟と勇気の集大成でなければならない。「大切な問い」とその問いに向きあった参加者と、そこでなされた会話、その帰結点の描写であるハーベストは、常に一期一会、偶然の産物である。イノベーションの研究者・池田信夫は「失敗には原因があるが、成功には偶然が必要である」と述べている。ワールドカフェはまさに、成功のために偶然の機会を増やす行為である。

都度都度の役割がまっとうできてきたかは、はなはだ疑問であるが、ここに機会を得て、ハーベストに関する研究に就けたことは、あらゆる状況と関係者への感謝に堪えない。ハーベストは、生き物だ。捉えたとしてもまた抜け、ゴール地点と思えたものがまたスタート地点となり、とどまることはない。その時点時点で、それが最良であったと「見なす」以外にない。「絶えず」である。グループ・ダイナミクスは言う。グループは変化する規範の流れの中にある、と。ワールドカフェは、変化する流れの中にあるのみならず、流れをつくる側であろうとしている、積極の未来関与のエフォートである。そのエフォートは、ハーベストが

その証左となってこそ前に進む。集合知は、与えられたものであるより、編み出した当人たちにとってこそ最大の効力を持つものであるからだ。

最後に謝辞を述べる。まず、この論稿は特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会ファシリテーション・シンポジウム2016の自由研究発表の機会をいただいたものに加筆修正を加えたものである。特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会のみならず、自由研究発表の分科会に参加して下さったみなさまに感謝する。そして、事例として精査させていただいた現場の数々、その機会をいただいた、福岡市、TAO CAFÉ、福岡大学地域活性支援塾 OB 有志、福岡大学エクステンションセンター、広島修道大学、東日本大震災復興支援財団、未来会議事務局、サントリー・ワールド・リサーチセンター、北九州市社会福祉協議会、福岡県男女共同参画センターあすばる、檜葉町、北九州市まなびとESDステーション、おごおり男女共同参画推進協議会、福岡女学院看護大学、自治労福岡県本部、広島市男女共同参画推進センター、熊本県、資源エネルギー庁、JR 東日本企画、薩摩川内市、玄海町、奥出雲町、福岡市自主職員勉強会「オフサイトミーティング・明日晴れるかな」、廿日市、清明会鹿毛病院、武雄市、広島市、JR 西広島駅周辺にぎわいづくり委員会、環境省、復興庁、カリタス修道女会、サントリーウェルネス、九州大学産学連携センター、久留米市、双葉郡 8 町村教育長会、福島県教育委員会、KO-TO (コート) 東小金井事業創造センター、ほか、多くのみなさんへ感謝する。未来をシェイプする場に立ち会うチャンスをいただいたこと、ともに未来を垣間見ることができたこと、かつ、ワールドカフェとファシリテーションに関する知見を研鑽する機会を得たことは、感謝に堪えない。あわせて、ここまでワールドカフェとファシリテーションに関する指導をいただいた、香取一昭氏、大川 恒氏、エイミー・レンゾー氏、堀 公俊氏、加留部貴行氏、中野民夫氏、嘉村賢州氏、各師に感謝する。

注

- * 1 アニータ・ブラウン／デイビッド・アイザックス『ワールド・カフェーカフェの会話が未来を創る―』、2007 年。なお、論稿中は、以下、単に「著書」と表記する。
- * 2 ワールドカフェは、簡単な手順でリラックスした雰囲気をつくり、自由に意見が出しあえるようにする話しあいの形式。参加者を小グループに分け、たびたび席替えを行い偶発性を喚起する。アニータ・ブラウンとデイビッド・アイザックスが創始した(2007、『ワールド・カフェーカフェの会話が未来を創る―』)。
- * 3 対話については、哲学における「対話」から、ワークショップにおける「対話」までの橋渡しを物理学者デヴィッド・ボーム『ダイアログ』(2007)に見ることができる。これは、意味の発見、一貫性と非一貫性、内在秩序などの語用で、「対話」をひもとき直した論説である。さらには、「学習する組織」に寄せて、ピーター・M・センゲが「対話」的なディスカッションの機序について述べている。センゲのいう「学習する組織」は、共有ビジョン、メンタルモデル、自己実現(マスタリー)、チーム学習、そしてシステム思考、という5つの学習領域を持っているとしている。特筆すべきは、学習する組織を形成する個人を、単なる労働力ではなく、主体性と協働性と成長への意思をもった自由な人間である、としている点で

- ある。ピーター・M・センゲ『学習する組織』, 2011
- * 4 香取一昭／大川 恒『決めない会議』(2010)
 - * 5 香取一昭／大川 恒『ワールド・カフェをやろう!』(2008)
 - * 6 野村恭彦『フューチャーセンターをつくろう』(2013)
 - * 7 ワールドカフェのテーブルクロスには模造紙を用いることが多い。この記述は、テーブルクロスを意味している。
 - * 8 「ポストイット」は、住友スリーエムの登録商標。一般的には付箋。
 - * 9 マインドマップは、思考の図解表現技法。図案化された箇条書きで、ノート取りや板書に用いられることが多い技法。教育者トニー・ブザンの提唱によるもので、シンクブザン社の商標登録。トニー・ブザン／バリー・ブザン／神田昌典(訳)『ザ・マインドマップ』(2005)に詳しい。
 - * 10 OSTは、輪になってテーマ出しを行い、自己組織化された即席の分科会を立てる話し合いの形式。課題解決のための話し合いに用いられる。ハリソン・オーエンが創始した(『オープン・スペース・テクノロジー』, 2007)。
 - * 11 AI (Appreciative Inquiry) は、ペアインタビューにはじまる組織改革の話し合いプログラム。「最善の状態で行われる人間の組織化と変化は、肯定することと正しく認識することを土台とした問いかけ(インタワイアリー)の連鎖的なプロセスである」としている。(ダイアナ・ホイットニー&アマンダ・トロステンブルーム『ポジティブ・チェンジ』, 2006)。
 - * 12 フューチャーサーチは、共通認識からはじまるコミュニティのワーキング手法で、共同で歴史年表を書いたり、「残念に思うことと誇りに思うことのワーク」を行いながら、行動計画を立案していく合宿型のプログラムである(マーヴィン・ワイズボード／サンドラ・ジャノフ『フューチャーサーチ』, 2009)。
 - * 13 マグネットテーブルは、参席者の一人ひとりが話しあいたいテーマを相互に開示して主体的にグループをつくり話しあう形式。OST形式の簡易版として機能する。特定非営利活動法人場とつながりラボ home's viが推奨している。
 - * 14 筆者は「対話」にはどんな有効性があるかを、3つの論稿にまとめた。ひとつは、市民の対話を公共政策立案の端緒とするあり方を「パブリック・プロセス」として論考した。田坂逸朗「パブリック・プロセスとは何か?—ファシリテーションが変える、市民の未来創造—」(広島修大論集 第55巻 第2号(2015年2月), 広島修道大学) もうひとつは、個別のアンケートとその集計に替わるものとして、「対話」の成果を調査成果として活用するアプローチを「協創的ヒアリング」として論文にまとめた。田坂逸朗「地域イノベーションを促進する協創的ヒアリング手法の研究—未来創造のためのファシリテーション—」(広島修大論集 第55巻 第1号(2014年9月), 広島修道大学) さらには、ウチとソトを結ぶ、プロジェクトの「対話」が固定的なコミュニティの衰えを回避するとして「プロジェクトメイト・コミュニティ」という言葉を提示した。田坂逸朗「プロジェクトメイト・コミュニティ論—コミュニティ再生への、ファシリテーションからのアプローチ—」(広島修大論集 第56巻 第1号(2015年9月), 広島修道大学)
 - * 15 南アフリカにおいて1991年から民族和解を推進するモン・フルー・シナリオ・プロジェクトに参画したファシリテーターであるアダム・カヘンは著書『未来を変えるためにほんとうに必要なこと』(2010)中に、「する力」と「させる力」として、力の生成的な面は自己実現の衝動としての「する力」であり、退行的な負の面は他者の自己実現を盗み取る「させる力」である、としている。人は誰かによって解決されたいと願っているのではなく、真の解決は「わたしがやる」によってなされる、と述べている。ここでいう「ファシリテーション」については、以下を列挙しておく。
堀 公俊はファシリテーションを、「集団による知的相互作用を促進する働きのこと」としている(『ファシリテーション入門』, 2004)。
フラン・リースはファシリテーションを「リーダーシップの一形態」で、「グループのメンバーを鼓舞し、誘導し、参加を促して、創造性や当事者意識、生産性を引き出す」とことと定義している(『ファシリテーター型リーダーの時代』, 2002)。
また、中野民夫は、「簡単には答えの出ない問題について問い合う場を作り、対立する集団や個人の関係をできるだけ容易にし、切れてしまった関係のみならず、人と社会、人と自然の世界をつなぎ直し、一人ひとりの存在、経験、知恵を引き出し、バラバラではできなかった相乗効果を促し、励まし力づける」としている(要約:田坂逸朗)(『ファシリテーション革命』, 2003)。
津村俊充は「関わり方のひとつ」で、「個人やグループの気づき、成長(変化)に関わり、「学習」を援助促進すること」としている(『ファシリテーター・トレーニング』, 2010)。

参 考 文 献

- アニータ・ブラウン／デイビッド・アイザックス／ワールド・カフェ・コミュニティ『ワールド・カフェ』
ヒューマンバリュー, 2007
- ハリソン・オーエン『オープン・スペース・テクノロジー』ヒューマンバリュー, 2007
- フューチャー・サーチ
- マーヴィン・ワイズボード／サンドラ・ジャノフ『フューチャーサーチ』ヒューマンバリュー, 2009
- ダイアナ・ホイットニー／アマンダ・トロステンブルーム『ポジティブ・チェンジ』ヒューマンバリュー, 2006
- 香取一昭／大川 恒『ホールシステムアプローチ』日本経済新聞出版社, 2011
- デヴィッド・ボーム『ダイアログ』英治出版, 2007
- アダム・カヘン『未来を変えるためにほんとうに必要なこと』, 英治出版, 2010
- アダム・カヘン『手ごわい問題は, 対話で解決する』, ヒューマンバリュー, 2008
- C・オットー・シャーマー『U理論』英治出版, 2010
- ジョセフ・ジャウオウスキー『シンクロシティ』英治出版, 2007
- ピーター・M・センゲ『学習する組織』英知出版, 2011
- ピーター・センゲほか「フィールドブック 学習する組織『5つの能力』」日本経済新聞社, 2003
- ピーター・M・センゲ, C・オットー・シャーマー, ジョセフ・ジャウオウスキー, ベティ・スー・フラワーズ『出現する未来』講談社, 2006
- 堀 公俊『ファシリテーション入門』日本経済新聞社, 2004
- フラン・リース『ファシリテーター型リーダーの時代』プレジデント社, 2002
- 中野民夫『ワークショップ』岩波書店, 2001
- 中野民夫『ファシリテーション革命』岩波書店, 2003
- 津村俊充(編)／石田 裕久(編)／南山大学人文学部心理人間学科(監修)『ファシリテーター・トレーニング』ナカニシヤ出版, 2010

Summary

Study on the Harvest of The World Café

Itsuo Tasaka

The World Café is becoming more and more popular. The key words of The World Café are self-reflection, integration, and creation. The World Café is the method of dialogue for future shaping. However, the number of The World Cafés only for fun without post-process for future shaping is visibly increasing.

One of the reasons may be few examples of studies on the Harvest Session of The World Café. Therefore, in this study, the 16 examples written in “The World Café – Shaping Our Future Through Conversations That Matter” (by Juanita Brown) are classified into four basic methods and studied. Additionally, the latest 50 examples performed by the author of this article are studied based on the classification. The mechanism of Harvest Session where collective discovery is visualized and the priority order of actions are determined is uncovered.

The seven methods of four basic methods added by three creative Harvest methods are described listing seven selection reasons and six points to note, especially from the viewpoints of post-process, behavior transformation, reinterpretation, and reproduction.

The aim of this study is to increase the number of The World Cafés, as originally intended, where enough fruit can be harvested for future creation.